縁日商品

泉鏡花作

全一章

流も黒い、炭屋橋の上に立つと、つい鄰が京橋で、一重表が銀座通とは思はれないほど、其夜は暗かつた。

が、暗い中に、水續きの東の空を貫いて聳える。あれは何と言ふ建築であらう。兩岸の町を壓して、塔の頂に似た幾棟かの尖つた屋根に、晃々と星を鏤めた、其の四階三階のづらりと聯つた窓々の、眞赤なのがやゝ濁つて、朱の色した燈が、縦に、横に、斜に、直に、右左に、流れて、倒に眞黒な水に映る。此の一棟の建物のために、川に臨んで兩側に續く町屋の裏の、屋根も、廂も、窓の燈も、皆其の一つのゴヂツク式が描いた影のやうである。

其の影の中に、緩く、すら／＼と赤ちやけた尾を曳いて、一際色の濃い、黒い烏賊かと思ふのが、ふら／＼と浮いたのは孰れも船で、赤い尾の、ゆら／

＼と搖れるのは靜に棹をさして居るし、螺旋形に沈んだのは纜つたのらしい。石炭を積むか、炭俵か、鐵のやうに皆黑い。一寸紅でもさした風情に、艫に燈火の漏れるのが見える、其の中には船頭の妻が籠るのであらう。所帶する泊船と視た。

雲のたゝずまひに因れば、水に映る其等の影も、稻妻に似て褄からう。・・・・・空は秋のやうに澄んで風も無い。色染めた燈は、唯家と水の漆繪の艶を增して、ヴエニスの景色でも視るやうなのが、山の手の堀の　趣　とは、がらりと變つて、成程、銀座の背後だと頷かれる。

私は・・・・少時彳んで、それから渡つた。

七月十三日の夜である。

渡る、と右が竹河岸で、こゝは昔の江戸繪で見るのと今もさしたる變化は無い。宵ながら寂寞して、あの、すく／＼と、森を立掛けたやうな中空高き竹の梢は、銀座通の、青い流のやうな電燭の影を誘つて、銀河を倒に流す筏にも較べられる。　ー　露

は竹束を走るやうで、其の雫かとも思はれるまで、水打つた道の涼しさ。

向つて、正面の町の眞中に、地から五六尺高い處に、ヨイと赤い手拭で顱巻した提灯が鮎いて居る。吃驚せまい、何、三脚に竹を組んで、朱筋入の消防の看板を結へた車留めの目標で。唯見ると、最う其から前は、銀座の空の蒼いのに對して、一度中が恁う薄暗く途切れた前途へ、ぽつと町の幅一杯に薄萌黄の靄が流れて、其の中へちら／＼とかんてらの影が浸入む。さながら金魚の泳ぐやうに・・・・・緋の切の髪も往けば、白い足も來て、中形の浴衣の帶、袖棲も、経緯に、すら／＼梭で織る状なる人の往來は、問はでもしるき露店の中の人通りで、具足町の清正公の縁日なのである。

私は御堂を志した。

行掛つて、ふと橋手前から顔馴染の、車留めの提灯に面を合すと、高さは額ぐらゐな處に、圓い顔をもくりと出して、ふ、ふ、ふ、と赤い口で莞爾として居る。仔細あるべき嚴めしい消防の看板も、町内

馴染の女　子供を迎へて居るやうで面白い。

「かた／＼かた／＼かた／＼、
さつ／＼さつ／＼、
ちよろ／＼ちよろ／＼
さつ／＼さつ。」

あゝ、水機關がおいでだね。　ーー
硝子細工の、仕掛の中を、白玉、紅玉がスイ／＼と、時々はずんでスポンと上る。其の白玉のあとから、紅玉が又スポンと飛上る、・・・・・此の時は並んだセルロイド製彩色入の福助がひよこツと行つて、コツゝリと叩頭をする時で。叩頭をしたまゝ、天窓の顱へしやら／＼と水を浴びる、浴びつゝ餘りの冷たさに、こりや何うぢやとコトンと其の出額を仰向けて、私笑と成るのを機掛けに、搦んで、噴上の水の上に撓めて待つた白玉紅玉が、颯とほぐれて、上下にクル／＼と舞別れる。別れるかとすれば、又スイ／＼と水脇をちやんぽんに舞上る。　ーー　拵へものゝ鮎も晃平と飜る　ーー　就中、淀みなく、怠りなく、精々と硝子の水車を廻すのは、竹の子笠

を横ちよに被つて、空脛の腰で屈掛つて、輪に攀上りさうな瀬戸物の親仁で、ちよこ／＼ちよこと踏交す足に、雫ほどの絶間も無いが、煙管を横啣へは呑氣らしい。で、カタ／＼カタ／＼カタ／＼、と斷えず音を立てるのは、此の親仁が茶色の脚の上げおろしに、水車を廻すので、廻るに連れて、さつ／＼と玉のやうな繁吹を散らす。ちよろ／＼と水が溢れる。

「かた／＼かた／＼かた／＼、
さつ／＼さつ／＼、
ちよろ／＼ちよろ／＼、
かた／＼かた／＼かた／＼。」

此も聞きやうである。

相並んでか、或は向合つてか、其處等に半袖の襯衣の大膚脱で、廂の上まで伸上つて、大手を蜿蜒ち、虚空を掴む、雜貨の糶賣屋だの、鞭で板戸を引拂く後　顱巻のバナヽの棄賣が居るのだと、商賣も逆上つて穩和でない。世に連れて忙しく、

「買へ／＼買へ／＼、

一寸々々一寸々々

さあ／＼さ／＼さあ／＼

買へ／＼かへ／＼。」

などゝ聞えるのであらうけれど、鄰に店を並べたのは金魚屋で。・・・・・頤の長い悠暢した小父さんが、生ものを扱ふ癖に、植木屋よりは氣長で靜肅で、小兒を龜の子のやうに集らせながら、煙管をトやつて、肱で鷺の首の如く撓めて持つて、喫みもしないで、仰いで天文を窺ふ顔色、秋の洪水を卜ふらしい。從つて水機關のカタ／＼も、細瀧の奥深く蟲鳴く氣勢がある。

向側が又蟲屋の店。（凡そ夜店で默つて賣るものは、）ーー と唄にも聞える、靜まり返つたもので、鍋を煮立たせ、油の湧上るやうな群集の中でも、此の蟲賣の店ばかりは、水をさしたやうに薄暗く寂寞したものである。

お定りの市松障子の露除に、華著づくりの蟲籠を掛揃へた、夜更には月も映さう、廂の暗い處へ、薄

墨に掛けた行燈に、松蟲鈴蟲を板頭、草雲雀、耶鄲、鉦たゝき、姫こほろき、きり／〻／す、と、細筆に假名で記したのを、恁う覗くと、刈萱街道、尾花宿の桔梗屋に、露を敷寢の草枕で、遊女たちの名に見える。成程宿場だ。あれに馬のやうな顔がある、轡蟲と言ふ姉さんだと聞く、

次に出て居たのが、瀬戸物屋だつたが、此も千草色の破れ股引を、ぐしやりと半裸體の胡坐から、汚い古褌を故らに，溢出させて、髪を蓬に黄色い齒を露出しながら、「何うでえ野郎ども、阿魔子等、買はねか・・・・・・買はねえな。よし！　そんなら一番・・・・・何うでえ、今度はと、汝畜生めと、天下大變日の下開山、横綱御免と云ふ奴を拜ましたらい、驚くな。・・・・・」　などゝ下司と惡體を賣ものにするのではない。小さい圓髷、小瀟酒した女房が、拂を行儀に持もながら、一寸柄をかへして頸を搔かうと言ふのが腰を掛けて控へたのだから、並べた皿小鉢、神酒徳利には塵も据ゑないほどなのであつた。

ト此の女房と、立ちながら何か言葉を交はして居たのは、店鄰の、「藥種屋、化粧品店に於きましては一個五錢いたしまするのを、手前店に於ては三個五錢を以て御求めに應じまする、中も外も、上も下も（カチ／／カン／／）（カチ／／）ーー混りなし」の樟腦屋。

但し一立て口上の濟んだ處らしい、お立會は、がらんとして一人もなくツて、芬と樟腦が地に薫る。

さて、目を移すと、此方の側の、金魚屋に鄰合つたは、此もお馴染の風鈴賣。

燒くものも、焙るものも、湧立つものも、油でぐわら／／と煮るのさへ、やがては其處等に澤山あらう。よくも縁日の取つきに、選んで凉しいのを恁う揃へた。

燈火も透通つて、金魚の紅も濡色の鮮明に、往來ふ人脚に埃も立たず、女の裾も、髪も、水際の立つたのも、山の手では」、いかでと思ふ。

袂にそよ／／と通ふ風に、選ぶチンリン／／と、風鈴が小唄を忍び音で優しく唄ふ。チロ／／リン／／／／、チン、チロ／／／／リン／／／／・・・・・硝子だと思へばこそ、玉を轉がす音色がして、颯と氷を刻み、水晶を削つたやうに荷を蔽ふまで白妙に裝飾つた、鯉の瀧登り、小鮎の瀬走、艫も舳も水の流も、皆水晶の屋形船。花火仕掛の色入は、お小兒衆のお慰み、庵の窓の玉簾は、そんじよ其處らのお妾好、枝垂櫻の裝は、この硝子を倒にせずとも、町の娘の風情であらう。

音の床しさと、清らかさと、涼しさに、おとなげもなく、私は少し立離れながら見て立つた。

ふと思出した事がある　ー一

今は故人と成んぬ。講釋師邑井一は期界に比類なき名家であつた。小夜衣草紙。三千歳直侍の、題は忘れたが河内山の講談だの、仙臺萩、押上鶴の的矢、五福屋政談など、世話、時代、出家、遊女、武家、町人、ものとして可ならざるはなしと言ふ十八番もの、中に、紀伊國屋文左衞門一代の眞中に、

なまけものゝ支配人長五郎が、いざ、腕を顯すと言ふのが明夜の前講と成る。讀續きに、明暦三年江戸中を火にした振細火事が出るのであるが、妙齢の娘三人の千筋の黒髪が、因縁に搦んだ、荒磯に菊模様の振袖を、本郷丸山本妙　寺の境内で百僧の供養の後に、やがて薪に曝し載せて火を鮎けると、上野の森を帯にした、追分の中空から一陣の魔風どツと颶と成つて落掛り、渦を捲いて炎をつゝむと、いま燃上る薪を攫つて、白菊の振袖を、袖褄にひら／＼と火を搦めたまゝ、棟より高く吹上げると、すらりと裾を引き、肩を落し、袖を投げて、娘が着て立つて悄乎とした姿と成つて、黒雲の上に、恁う　ーー燃えつゝふら／＼と飄つた、と言ふ・・・・・物語。

で、其の一席を讀む前に、一が自分で出會つた、と言つて話をした。旋風と言ふものは可恐しいよりは、不思議な、妙な事をするもので・・・・・一が自分、空板の小僧の頃、師匠のも一所に種本を包んだ風呂敷包を恁う首へ掛けて、郡代の席亭へ行く。・・・・・夜講を早めに、てく／＼人形　町を通つた、七ツ下りと言ふ夏の晩方の事で、すると風

鈴屋が一人、チンリン／＼と雪の鎧、雪の草摺を着た、臺所の合戰の大將、前桐箪笥守と言ふ形で、町の柳を通つて行く。・・・・・道は廣いのに、おなじく空板も日蔭を辿つて、其の後から六七間、大觀音を前途に見て、一歩風鈴賣の荷の前へ出て、やがて濱町の辻と思ふ途端に方角も分らず、地震で地が裂けたかと肝を消した、眞赤な砂に、ぱッと包まれて、早腰を拔かして大地へのめつた、凄じい旋風で。

あッと氣が着いて膝を支いたなり、きよろりと目を〓つて顔を上げると、何と・・・・・柳の上の中空に、其の風鈴の荷が天秤を通したまゝ、人の荷つた形で、チヤラ／＼チヤラと鳴りながら、短册一枚落ちもしないで・・・・・ト身寒ひをするやうに搖れながら、あれ／＼と見る／＼うちに砂煙の大波はどッと鳴つて大河の方へ渦卷いて行く。あとに殘つて、拭つて晴れた夕月の前に、晃々と青く光つて舞据つた。　ー　扨て本妙　寺の振袖は、と言ふのである。

と、思ひながら見て居ると、鯉や鮎は然もないけれど、水脚を幾條となくすら／＼と硝子で白く引い

た、ぎやまん製の屋形船が、何うやら、スツと浮出して、ふら／＼と天へ漕いで上りさうな氣がする。

・・・・・・

雲が水のやうに、すら／＼と搖れて、縁日の灯影に離れて、薄りと光るのは、何うやら月が出たらしい。

おゝ、玉を鏤めた船が通る、銀の櫂で薄雲を分けて、漕いで。　・・・・・・

いや待てよ、道草が過ぎる。

と思ふ下から、目を返した、向う側を、件の樟腦屋と、何やら二ツ三ツ露店を離れた處に、ぐるりと人の輪が、然まで濃くなく、ちよろ／＼と頤を嘗め、袖を潛るが如く、店ならびには珍らしい蝋燭の灯かと思ふのを取卷いて立つたのがあつた。

又覗いて見たくなる。暮雨庵曉臺の句だつたか、

・・・・・・

いそがしや茅花を摘めばつく／＼し。

此方は小兒だ、小兒だと　　・・・・・

「いや、お立會、何とお立會、最う恁うなりや、手前口上は拔きにして、友達だ。いやさ、御迷惑だらうけれど、親類交際でお話がしたいんだよ。」

と、疊　半疊ばかりの筵の上に、鼠の穴だらけ、禿げた紺、狐色の風呂敷をぐな／＼と擴げた上に、菓子箱の蓋を置いて、洋鐵の茶筒を捻切つたらしい風除を四つ五つ端の方へ立掛けた、其の二つに、百目も掛るぐらゐな・・・・・成程・・・・・蝋燭をひよろ／＼と燃した、片隅に、マツチ箱ほどな紙包にキラ／＼と針を入れて並べたのを、割膝に引着けて、手織縞のよれ／＼の單衣の肩を尖らした、痩せこけた腕まくり。額が拔け上つて馬沓形に輪取つて、スク／＼と半白髮の生えた、垢染みた汚い爺の、見る影も無く、目ばかりきよろ／＼と光るのが　（口上は拔きだ。）　と云ひつゝ、然も辯論半の處。

柄に似ず元氣壯な聲で、

「何とお立會、おい、兄弟、いやさお互に此のせち辛い世の中だ。見渡した處、さすがに場所がらだに因つて、顔色に豆粕の汚鮎もなし、じやが芋の青ン膨も見えねえけれど、お察し申す、樂ぢやねえて。・・・・・塵木ツ葉も徒用にしねえで、箒もこすいほど扱はねえとかで、飯もお然らばと言ふ末世だ、からこゝで廢物利用と言ふ、臺所　肝心のお経があるがね。何の事だが、手前に繪解は分らねえが、詰る處は、と要らねえものでも中途で掬つて、棄てる中から得を拾へと言ふ教さ。　ー　御尤　でがす、此奴はお前さん、色氣づいた年頃の忰に向つて、婦を欲しがるな、と言ふやうな、分らねえ理窟と違つて、廢物利用、聞えた話だ。こゝを、お聞きなさい、聞かぬは末代の恥だと、可いかね。・・・・・手前もこれ、當年取つて六十九に成る。年に不足はねえけれど、幾つに成つても三度の飯は頂きてえ。いやさ、飯の一かたけや二かたけは我慢をしても、飲酒てえのが因果でね、大道で蚊に食はれて、恥の御披露をすると言ふのも、詰は酒の爲す業だ。これでも備前の岡山ぢやあ三代續いた針屋だがね、工場二つ飲潰した因業な爺だよ。いやさ、お立會。」

と、じろ／＼と、上目に周圍を〓して、ニヤリとしながら、

「御意見無用だ。三人の忰と二人の孫が、爺よ、父上、おん祖父や、おとゝ様、貴下はな、とそれ、嫁までが疊を敲いて意見をするのを、ほつても肯かねえ惡親仁だ。えゝ、飲ますな、干さば干せ、俺が働きで俺が口で、灘を鵜呑みにして見せうと、神戸へ飛出し、大阪で轉んで、京都で這つて、鴨川の水を飲んだ。何とお立合、食ふものさへ食へねえから瀬田の橋を噛りながら、近江の湖水は見たばかり。番場、醒ヶ井・・・・・は情ねえ、柏原でも貸しやせずよ、伊勢路へ落ちて、桑名を泳いだ。熱田で熱欄どころかい、のつけから香物で茶漬の、さら／＼と話は早いや。小夜の中山で行暮れて、蔓の細道くらやみを辿る時、夜泣飴の婆さんが、あはれや衆生、暗路を照らせと、施してくれたのが、ソレ御覽じろ。」

と蝋燭を取つて、一掴み。で、薄汚い指の如く、五本に分けてカラ／＼と捌いて、

「此處だ、お立會、此は其の時、婆さまの傳授を受けて、手前が件の廢物利用、何と兄弟、いやさ、其の時の婆様は、地藏の化身と拜まれて、光明は赫燿と、十方世界を照らせどもと・・・・・見た處の代物がと言へば、二見ケ浦の名産、干若布に蛞蝓が這つた形だ、若布が眞だ。」

とグイと引き、輪にして扱いて、

「蛞蝓が蝋だてね。可うがすかい、下さるものは下された、はて何と言ふ蝋燭だと聞いた時だよ。媼どのゝ申さるゝは、なんまいだ、其の眞にしたのはや、雜巾襤褸の切屑を細裂いて乾したのに、なう、蝋燭の蝋の流を溜めて置いては、煮て溶かいて、つる／＼と卷きますわいのと・・・・・何と、お立會、聞くは一時の恥、聞かぬは末代の恥、いやさ、お立會、今の此の時代柄に、恥も外聞もあらばこそだ、が、聞かぬは末代の損、聞くは一生の得と言ふのは此處だ。・・・・・其の時、蝋燭の製法を傳授されたればこそ、可うがすかい、大杯と名にし負ふ、野見盡されぬ難有さ、武藏野の江戸を便つて參つて、手前當時、本所に住居いたすでやすが、此の間押

上の河岸を通ると、あの邊は　傘　の職人が澤山居るがね。一軒の傘屋で、油紙に引いた、蝋の滓を、蜜柑箱に、小僧がぞんざいに打撒けるのを見た。立停まつて覗けば、箱に打棄り溜がどしことある。手前ふと心付いたによつて、　親方御免なせえ、　と引立つて目量を引くと、彼是二貫目は確だが、何と蝋滓を讓つちやおくんなさるめえか、」　と言ふと、

「あゝ、可うがすとも、お持ちなせえ、どうせ打棄るんだ、無錢でも可いが、お持ちなさり憎けりや五錢も置いておいでなさい。」　と其處で引取つた。が貰つたも同然だ、可うがすかい。・・・・・さあ、此處だ。處で木賃へ歸つてから、破鍋を借りて、ぐら／＼らと其の蝋滓を煮た奴を、そら、此の眞を御覽じろ。」

と、一條よれ／＼に引張つて、

「何とお立會、此奴はね、もし、事も愚や薄汚えが、　褌　の切端ぢやあねえ。手前めりやすの着古しを解した絲だ。」

で、ブツリと前齒で其の絲眞を引切ると、下目で撓めて鼻の下へ吸込むやうに、ちよろり、と灯を點け、

「何うだ、兄弟。」　と洋鐵の火蔽に立てながら、
「光明遍照十方世界だ。」

アゝと口を開けて、けろりとした合點笑で、
「功徳無量檀婆羅蜜だろ、凡そ百目掛ぐらゐな蝋燭が、傘張の殘滓で五百挺、ーー　隅田川は滿艦燭だ。だが、お立會。手前蝋燭を商ふんぢやあねえよ。此は唯、聞いて得を取つたと言ふ譬喩に留まる。處で、手前は岡山の針問屋だ。いやさ、其の問屋を飲潰した因業親仁だ。が、因業親仁のしやうがにや、孫子を五人、酒樽へひりつけて置いたのが成人して、兵除の用にも立ちや、商賣もする、次男と三男が當時其の國表で、針屋をして居る、可うがすかい。さあ、此處にある此だがね。」　と言ふ。

私は、並べた鍋の手摺れに、サラ／／と渡る風が、秋のやうに身に沁みた。而して其が、齒磨屋より、煙繼屋より、金剛砂の研石を賣るより、合成金より、粹島の棄賣より、弘法の石芋より、何となく可懷しかつた。

然も此の時、ぽつとして濕味のある、美しい優しい目が、人立の中から針屋の店を覗いたのである。下町生粋の十六七、絲より最惜い華奢なのが、フツサリと白い菅絲を掛けた高島田で、素膚の玉に襟深く、紺地に、お納戸の翁格子の浴衣がけで、淺葱の麻の葉の帶を〆めた、袂をゆつたりと腰を細く、片袖でふつくりとした胸を包んで、人立の上氣ほんのりと、羞含んだとよりは微笑んだやうに見える。

針賣る翁に、此の娘。

私は七夕か、と何となく人の肩越に空を仰いだ。いよ／＼晴れた星の空に、何處からか薄絹の輝くやうな月影の映すのを見ると、フト振袖火事を思出して、三人の娘の一人は、確か日本橋の裏通り、遠くも無い此の邊・・・・・妙に後が見られた。が、瞳を返すと、娘の姿はありのまゝに消えないで襟は雪より白かつた。

銀杏返で、横幅は廣いが、一寸猫背で、拔衣紋の帶を膝下りに、何うやら小氣轉の利くらしい、二十

二三、女中らしいのが團扇を手にして附添つて居たのである。

爺は割腰を居直つた。

「何と、お立會、いやさ、難有えものぢやあねえか。小兒さへ拵へて置きや、家藏を飲潰さうとも、野天賭博で、まゝの川だ。御國のためにも奉公すりや、こんな親でも親だと思つて、嘸ぞ旅他國で不自由なされう、勝手工面、錢金ぢやあ貢げねえが、屋根代米代になされ、と吐いて、御覽じろ。」

ひらりと端書を灯に翳して、

「當月分の家賃米代と仕り・・・・・と畜生めが、」

ぽんと叩いて、

「飲めとは言はねえ、酒啖へ、とは言はねども、此の通り。　ーー　本所花町と、手前の宿だ。得田孫八、田ぢやあがあせん、田と言ふんだ。得田孫八、爺の名だよ。　ーー　可うがすかい。備前で聞いたら、得田針と言つちやあ名代だ。其奴を何と、右一

貫目分相送り　申　候　と、此だてね・・・・・此が、縫針、　（サラリ）　此が繼針、　（サラリ）桁針、（サラリ）　絹、紬、木綿とも、本磨の別鍛だ。・・・・・我ものを自慢ぢやあねえが、此奴を見なせえ、針の目だ。目だが、得田針に限つちやあ、一子相傳の秘訣を以て、絲を通すに目玉は要らねえ。絲を當てれば針が通る。」

と、何と一挺、蝋燭の燃やさぬ眞を、ついと扱いて片手で針を取り、針を取り、針を取つて當てると見ると、さら／＼と鳴るばかり、篝火の影の綾に白魚の競ふ如く、ちら／＼と光つて、ツゝと通る、瞬く間に十四五本。

孫八、肩を聳やかし、

「何とお立會、何と／＼お立會、いやさ、何うだ兄弟、御入用とあらばお持ちなさい、何うせたゞで呉れた、然も重量で一貫目だ。傘屋の滓ぢやあねえが無錢で上げる、いえさ、お鳥目なしに獻ずるよ。・・・・・手前が飲まなきやあ濟む事だ。小夜の中山飴屋の地藏で、　光　明　遍照十方世界だ、功徳無量檀婆羅蜜と、然しでがすて、願はくば此の

功徳を以て、ト一杯飲めたら尚ほよかろと　・・・・・何とお立會、さあお持ちなさい、絹、紬、木綿とも針は縫、紡、繼、刺がお望み次第、さあお持ちなさい。だが、志あつて、爺に一杯飲ませて遣らう思召があつたらば・・・・・傘屋並の五錢、三錢、二錢でも構はねえ、突錢でお出しなさい。だが金錢ぢやあねえんだよ。錢は要らねえんだよ、要らねえんだから、お持ちなさい。」

と言ふうちに、四五人は最うツイと退いた、側は薄く成つて、蝋燭の灯が、颯と白けて靡く。

「持つてかねえか、要らねえのかね。」

人垣を拂はれて、枝折戸を出た状に、娘は蝋燭に照らされて、目で附添にものを言つた。が、女中は一寸頭を掉つた。

「何とお立會。」

爺は聊か嶮しい顔して、

「不可ねえかい、いや、不可ねえと成ると本音を吹くが、取つちやあ食はねえ、皆を取つちやあ食は

ねえが、實は此方が飲めねえんだ。いやさ、飲めねえより食へねえんだ。一番ぶちまけるが、買つてくんねえ。針を買つて飲ましてくんねえ。見得は言はねえ、食はしてくんねえ、頼むよ、旦那、御新姐、何うだ、不可えか、不可えか。不可えか。不可えな、可し。」

と一喝した意氣込みに、散りかゝつた、立會は何となく、胸倉を取つて引止められた。

「仕方がねえ、飲めなきやあ、蝋燭を飲んで遣る。」

唯見ると火の燃えたのを、あぐりと口へ、嚇と頬邊が眞赤に成ると、續いて一本、又一本、つる／／と頬張つたのが、消えると鬼の面の如く、鼻も小鼻も暗く成る時、

「それから針を食つ了へ。」

ざくりと取つて一撮み、束藁握りに掌に扱いたと思ふと、ざら／／と頬張つて、齒でバリ／／と音を立てた。トタンであつた。あと口を開くと、燃さしの火よりも眞赤な舌の上に、綱を縷つて晃乎めいた、五六百本もあつたらう、見物に向つて喝と吐

いた。呼吸の力に、ともし殘りの唯一挺の蝋燭を颯と消すと、倏忽の間に四邊は暗く成つて、親仁の赤い顔と、白髪と、黒い單衣は、電信柱の一根ね》に、胸を引いて消えるやうに見えた。

「あれえ・・・・・」

他は知らない、娘の袖は波打つて向うへ駈けた。ゆらめく島田の菅絲は針を束ねたやうに鳴つた。チリ／＼と聞えたは、うしろの、ふうりんの音ではなからう。

呪はれはせずや、可愛い女。

飴屋の前を行き、酸漿屋の前を通る時も、私は自分でさへ、身體中をチク／＼刺されて、幾度も頸と背筋を探つた。

無事をば清正公に念じたのである。

ー　仔細あつて、後に知れた、孫八は實は針屋でない。落魄した大道手品の手練である。至れる藝は、針を吹いて、期せずして、却つて其の夜に迫つた或呪詛の難から、其の娘を救つたのである

・・・・・これは話す折が又あらう。

柳の町の月の前に、辻の廻燈籠の影青く、水にちら〳〵と白魚の散る状も、晃々と射た針に見えた。

【完】